

＜支部連絡窓口＞  
千葉県隊友会館山支部  
事務局(代表)川村 徹  
Tel 0470-22-0230

このところ、毎日のようにコロナウイルス禍のニュースで持ちきりですが、メガ・ガスターとかオーバーシュート、医療崩壊、パンデミック等々物騒な状況が報じられ、感染拡大防止のためイベント等の自粛・中止が相次ぐ中、案じられていたオリンピックの開催延期も現実のものとなりました。まさに“由々(忌々)しき事態”と言えましょう。幸い南房総には感染の兆しは出ておりませんが、これらに関連したデマや便乗・悪徳商法が身近なところにも散見されるようです。一日も早い終息・収束を祈るとともに、日常生活の面で感染防止のため我々のできる精一杯の留意・努力を払おうではありませんか。

＜川村記＞

### 支部の活動概要

- |  |   |
|--|---|
| <p>《2・3月活動実績》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>3. 4(木) 千葉県隊友会後期支部長会議(中止)</li> <li>3.16(月) 会勢拡大キャンペーン(館山基地、中止)</li> <li>3.20(水) 館山市戦没者慰霊祭(鶴ヶ谷八幡宮、中止)</li> <li>3.26(木) 館山航空基地観桜会(中止)</li> <li>3.28(土) 年度末支部役員会(コミセン、中止)</li> </ul> | <p>《4・5月活動予定》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>4. 4(木) 千葉県護国神社奉仕作業(千葉市)</li> <li>4.16(木) 千葉県隊友会総会行事(6/15に延期)</li> <li>5.23(土) 館山支部総会行事<br/>(館空会との合同行事、検討中)</li> <li>5.27(水) 旧海軍落下傘部隊慰霊祭(安房神社)</li> <li>5.30(土) 5月支部役員会(コミセン)</li> </ul> |
|--|---|

### 令和2年度支部総会行事について

恒例の館空会との合同行事(両会総会、合同懇親会等)については、現時点では5月23日(土)開催を予定しておりますが、コロナウイルスの感染拡大防止に係る動向を見極めながら、4月上旬には両会の協議で実施の可否(延期を含む)を判断することにしておりますのでご了承ください。(別途、ハガキでご案内します)

＜支部長＞

### 県隊友会の財政再建について

目下、県隊友会の「財政再建」のための方策が真剣に検討されておりますが、ここでは県隊友会の財政基盤である「会費収入」の実情と財政ひっ迫の根本的な要因について述べ、現状及び今後の県施策の理解の一助になれば幸いです。

○県隊友会の財政基盤とそれを支える会員の現状

県隊友会の財源は、会員の会費収入、すなわち年会費(3,000円)と(旧制度の)終身会費収入(3,000円×10年分)が基盤になっています。(ただし終身会費制度の廃止に伴い「終身会費収入」は平成29年度まで)

現在(令和元年度初め)県隊友会の正会員数は3,050名(概数比率で年会員25%、終身会員75%)ですが、県の財政事情に鑑みて十数年前から「入会后10年を経過し75歳未満の」終身会員に対して会運営協力費として年額3,000円の納付について協力をお願いしております。⇒元年度の実績:500名余の該当会員の45%から協力をいただいております

○経済情勢の変化とその影響

(20年以上前の)バブル崩壊による物価の高騰、金利の暴落(ゼロ金利)等に加えて、新公益社団法人の認可(H23)に伴う事業活動の拡大・経費増大の反面、隊友会設立後60年間にわたって収入源としての年会費及び終身会費(ただし平成29年度までの「会費額」が手付かずのまま現在に至っております。⇒「収支バランスの不均衡」を生み出した根本的な要因と史料

○今後の「財政再建」について

最早、「経費削減」や「終身会員に対する協力費のお願い」では解決できない段階にきているのです。隊友会設立以来“不変”の「会費の額」や終身会費制度の廃止に伴う終身会員の会費?の問題等、現在の経済状況に見合ったものにすべきではないでしょうか。いずれも隊友会定款の改定が必要な案件ですが、避けて通ったのでは抜本的な問題解決にはならないと考えます。

＜支部長＞

### レクイエム

- 1.19 渡邊正雄会員(海) ご逝去(享年85歳)
- 3. 2 関根 功会員(海事) ご逝去(享年82歳)  
謹んで哀悼の意を表しご冥福をお祈りいたします <支部会員一同>

### 会員の異動

- 3. 31 鳥居三郎会員(海) 退会申出  
会員として長年のご協力有難うございました。ご活躍ご健勝を祈念致します。

### 随想：知られざる中国自治区の実態

昨年12月に米下院で「ウイグル人権法案」が可決され、国務長官に対して中国政府によるウイグル民族の弾圧問題を調査報告するよう求めています。なぜ米国が中国国内の出来事に口を出すのだろうか、人道上の問題として国連が解決に乗り出すべきだと思うのですが。現在、コロナウイルス騒動の陰で鳴りをひそめた感のあるウイグル問題ですが、この問題の本質を把握する上で中国の自治区で行われている“弾圧・虐待”の実態について述べることにします。

#### 中国の自治区とは

中国では、“少数民族”を新疆ウイグル自治区、チベット自治区、内モンゴル自治区など五つの行政自治区に分けて管轄しています。「自治区」という“自治を認められた行政区画”の印象を受けますが、実態はどうなのでしょう。今年はコロナウイルス騒動で延期された「全人代(全国人民代表大会)」には、毎年、中国各地から大勢の地区・団体の代表が集まって華やかに行われています。色とりどりの民族衣装をまとった人たちはこれら自治区の代表なのです。しかし「全人代」は決して人民代表大会という性質のものではなく、共産党政府の権威を国内外に誇示するための何ものでもないのです。

#### 少数民族に対する弾圧・虐待の実態

漢民族(中国人のこと)に不信を抱き、“民族自治の拡大”を求めるウイグル人に対して、中国政府は2016年以降、再教育キャンプを設けてウイグル人(100万人といわれる)を強制収容し、“洗脳”と称して虐待を加えていることを米国が指摘し、その実態の究明に乗り出しています。ウイグル民族に対する弾圧・虐待がどのような形で行われているか、ごく一例を挙げてみます。

- ・先祖代々の墓の強制取り壊しや改宗(もともとはイスラム教徒)が強要されている。
- ・居住地には警備員や監視カメラがシームレス(切れ目なく)に配備され、住民の“一挙手一投足”が監視されている。
- ・住民全員に対するDNAサンプルや指紋、血液等の採取が強制的に行われている。

臓器移植のためのドナーの入手には最低数年が必要と言う世界の常識をくつがえして、中国では適合するドナーの入手が“いともたやすく”、毎年1万件以上の臓器移植が行われているとか。これだけのドナーが一体どこから出てくるのか、提供者が誰なのか、おおよそ見当がつくことでしょう。詳細なデータベースがあって初めてできることだと思うです。

- ・最近、「新疆ウイグル生産建設兵団」の集団移住など、ウイグル自治区への漢民族の流入(移住)が急速に増加している。
- ・ウイグル自治区には核実験場が建設され、また核廃棄物や産業廃棄物の格好の捨て場になっている。

等々、ウイグルではこのような“おぞましい出来事”が繰り返されているのです。これらは中国政府がウイグル民族の歴史、文化、宗教等の根絶、言い換えれば“民族の抹殺”を図っていると指摘する政治学者もいるくらいです。

最後に、日本の一流メディアがこれらの出来事をなぜ報道しないのか、沈黙しているのか、大変理解に苦しむところです。ドラマで知られるチベット自治区についても、チベット動乱に始まり、騒乱、寺院の破壊、住民虐殺、集団焼身自殺等々 悲惨な出来事に見舞われた歴史があり、現在もなお“対漢人不信”感情が根強く残っているのです。これについては今回は割愛することにします。

＜中国近現代史に関心を持つ会員(海)＞

### 「桜花43乙型特攻機」・・・余録・関係者の証言

前回まで述べたのは水交会誌に掲載された筆者の拙論のあらましである。掲載後、水交会員のK氏から丁寧な書状を頂戴した。K氏とは、S39. 3月にHSS-2型ヘリ1号機の領収を皮切りに本格的な対潜ヘリコプターの戦力化に貢献され、第9代の第21航空群司令(S50.7~51.7)を務められた岸本一郎氏(海兵72期生)であった。

岸本氏は、本土決戦が叫ばれた終戦直前の一箇月余、この桜花43型特攻航空隊の教官要員として教育準備に携われた希少な経験をお持ちの方で、以降文通により70年以上前の当時の状況など聞かせていただいた。

岸本氏の回想(叙述形式)

- 332空(兵庫・鳴尾基地)で戦闘機操縦士として勤務していた終戦直前の7月1日、新編の「725空」勤務が発令された。航空隊ナンバーから「桜花」系列の特攻航空隊であることは察しがついたが、時節柄、特別の感慨はなかった。
- 横須賀航空隊近郊の地下壕に仮設された725空本部に出頭して司令に着任申告。基幹メンバーの間で今後の訓練準備の打ち合わせが行われたが、すべてが初めて知らされた「桜花43乙型特攻(ウエポン&運用システム)」であった。
- 7月中旬、滋賀航空基地に移動、すでに100名近くの基幹要員が着任しており、岸本氏(当時大尉)は 飛行長の下に編成された飛行科分隊長(複数)として勤務することになった。9月からの訓練開始に備え、訓練シラバスから訓練手順、テキストの整備等々、五里霧中、暗中模索の中での突貫作業が始められた。
- 教官要員にはカタパルト発艦経験者が重用されると思っていたが、岸本氏自身、水上機課程での模擬的な訓練体験のみで、操縦経験にしても飛行科の先任飛行士ですら150時間程度で前途多難を思わせるものがあつた。
- 2空廠(木更津)で改造した「2式練戦(複座練習機)」の領収テスト飛行と滋賀基地への空輸が何回か行われた。訓練生の錬成の一環として、琵琶湖湖面での超低空飛行訓練も想定にあつたようである。本土決戦に備えた「航空機の温存」の指令もあり、操縦訓練時の発着操作はすべて教官が行うことも取り決められた。
- ほぼ完成していた比叡山山頂の発射訓練装置について、この運用を巡って教官の間で白熱した議論が繰り返されたが、どうい結論に落ち着いたのかについては全く記憶が無い。発射方向の麓付近には緩いスロープ状のかなり広い草地在り造成されていた記憶があるが、発射時の操縦操作や故障に起因する失速等、緊急着陸に備えたものであつたのかもしれない。以下割愛。

昭和20年8月15日正午に下された終戦の詔勅により、すべてが中止され、幻に終わったことはむしろ天祐とすべきであろうか。過ぎし大戦において、殉国の至情と家族、肉親、同胞への切々たる思いを胸に、悲壮な決意を抱いて戦場に赴き、散華され日本の復興と平和の礎になられた英霊に謹んで哀悼の誠を捧げたい。

岸本氏は一昨年夏、戦前戦後を通じ海上武人としての波乱に富んだ生涯を終えられた。衷心からご冥福をお祈りしたい。合掌

＜自称地域史探索マニア その26(余録)＞